

平成13年度

野尻（4）遺跡発掘調査概報

2002年3月

浪岡町大釈迦工業団地調査会

I 調査概要

遺 跡 の 名 称	野尻(4)遺跡(青森県遺跡番号 29063)
種 別	集落跡
調 査 期 間	2001年4月16日～11月16日
所 在 地	青森県南津軽郡浪岡町大字高屋敷字野尻地内
調 査 機 関	浪岡町大釈迦工業団地調査会(会長 三浦 貞栄治)
調 査 担 当	浪岡町大釈迦工業団地調査会 主任調査員 高杉博章 調 査 員 高橋 均・村上章久 主任補助員 成田昭美・葛西真里子・竹内絵美子・長内孝幸・ 赤平香織・永洞佐哉子・工藤 司 調査補助員 對馬英子・高谷美香子・東根寛茂・小山文子・加藤裕也 事 務 員 佐藤美峰・天内喜代里・木村亜希 作 業 員 天内のり子他48名
調 査 面 積	約28,000m ²
調 査 の 原 因	工業団地造成
検 出 遺 構	縄文時代：Tピット1 平安時代：建物跡103、掘立柱建物跡3、竪穴状遺構27、土坑651、 井戸跡8、耕作跡8、焼土跡47、ピット296、溝跡85
出 土 遺 物	縄文土器・石器・土師器・須恵器・鉄製品・土製品・石製品 (コンテナ 約130箱)
遺 跡 の 時 期	縄文時代、平安時代
遺 物 の 保 管	浪岡町大釈迦工業団地調査会整理室(旧浪岡町役場第2庁舎)

II 遺跡の概要と調査経過

浪岡町を南流する大釈迦川西方の低位段丘面上には9世紀中葉以降の遺跡群が密集しているが、浪岡町大字高屋敷字野尻地内に所在する本遺跡もその遺跡群のひとつである。今回の調査区域付近の標高は西側で52m前後、東側が43m前後で、遺跡は西から東方向の比高約9mの傾斜面に形成されている。昨年度の調査概報(高杉 2001)でもふれたように、2か年にわたる調査区域に隣接する東側では、県埋蔵文化財調査センターによって19,800m²が調査され、9世紀中葉から10世紀前半を中心とする時期の遺構が多数検出されている。

昨年度の調査では、約49,000㎡（調査時に実施された地形測量の結果では48,974㎡）の調査対象面積のうち約21,000㎡について本格調査を実施し、10世紀前半とされる白頭山－苦小牧火山灰降下前後を中心とする時期の建物跡70軒、竪穴状遺構 3 基、土坑189基、井戸跡 4 基、耕作跡（畝状遺構） 5 基、焼土跡61基、円形周溝遺構 2 基、埋設土器 1 基、ピット27基、溝跡64条を検出し、県で実施した調査区域と一連の遺跡としてとらえられることが明らかとなった。

本年度は、昨年度に引き続き残りの約28,000㎡の本格調査を実施することになったが、工業団地造成計画との兼ね合いから調査区域を 3 分割し、B～G－18～37区を 6 月末日まで、H～K－18～24区およびH～N－25～38区を 8 月末日まで、L～S－18～27区を11月中旬までの日程で調査することになった。発掘調査は 4 月16日から、昨年度保留したK～Q－15～17区の範囲にかかる一部の遺構の継続調査とともに開始した。調査対象区域は、国家座標に拠る10×10mを基本単位とするグリッドの東西軸B～S区、南北軸ほぼ18～38区の範囲である。

発掘調査に際しては、昨年度の調査で検出された火山灰の分析で白頭山－苦小牧火山灰の他に若干十和田起源の火山灰が存在することが明らかになったこともあり（根本・大友・藤田・一戸 2001）、遺構から火山灰が検出された際には必ずサンプリングを行うとともに、同一火山灰層における上位と下位の年代幅の存在を考慮して（山口義伸教示）、可能なかぎり火山灰層の上位と下位の 2 箇所からサンプリングを行うことにした。また、建物跡の竈などから検出された焼土についても微細遺物摘出のためのフローテーション用にサンプリングを行った。

B～G－18～37区では、建物跡32軒、竪穴状遺構 6 基、土坑162基、井戸跡 2 基、焼土跡26基、ピット60基、溝跡45条（ただし、この地区に限らず溝跡の大部分は各予定地区外にまで延びているので、各地区で表記した検出数は重複する。）の遺構を調査し、6 月30日にこの地区の航空写真撮影を行った。H～K－18～24区およびH～N－25～38区では、建物跡44軒、掘立柱建物跡 3 棟、竪穴状遺構13基、土坑259基、井戸跡 5 基、耕作跡 5 基、焼土跡11基、ピット140基、溝跡27条の遺構を調査したが、この地区は完了予定を遅れ、10月 7 日に航空写真撮影を行った。L～S－18～27区では、建物跡21軒（SI167は外周溝の一部のみを調査）、竪穴状遺構 8 基、井戸跡 1 基、土坑172基、耕作跡 1 基、焼土跡10基、ピット96基、溝跡27基の遺構を調査し、11月16日にこの地区の航空写真撮影を行って本年度の予定区域の調査を完了した。

この結果、本年度の検出遺構は建物跡が昨年度から継続調査した 6 軒を含めて合計103軒、掘立柱建物跡 3 棟、竪穴状遺構27基、土坑が昨年度から継続調査した58基を含めて651基、井戸跡 8 基、耕作跡 6 基、焼土跡47基、ピット296基、溝跡が昨年度からの継続分を含めて85条となった。

Ⅲ 検出遺構の概略

1 基本層序

本年度の調査区域内では土層観察地点を設けなかったが、本遺跡の基本層序は昨年度に準ずる。ちなみに、I 層が表土層、II a 層が上～中位に明黄褐色火山灰を断片的に挟む暗褐色土、

Ⅱ b 層が黒色土、Ⅱ c 層が沢筋に堆積した黒色土、Ⅱ d 層がⅢ層への漸移層である灰褐色粘質土、Ⅲ層が地山の淡黄色粘土で、遺構確認面はⅢ層上面ないしⅡ層下面である。

2 建 物 跡

建物跡は103軒検出された。ただし、これには本遺跡で特徴的な方向性のほぼ一致した「入れ子」状態の重複した建物跡等、建て替えによる重複遺構は含めていないので、それらを加えると実数はさらに増えて124軒前後となる。平面形は方形を呈するものが一般的で、長方形もみられるが、明確な掘り込みのある建物は少なく、平地に壁溝を回らせたという印象を受けるものが一般的である。確かに床面まで削平された建物が多いことは事実であるが、SI097やSI119のように30～40cm位の深さの壁をもつ竪穴が存在すること、あるいはSI118とSI119のように母屋と前小屋のセットをなしていると考えられる建物跡で、前者が平地、後者が竪穴という構成をなすものが存在すること、あるいは壁溝や外周溝の深さ等から判断すると、竪穴を掘り込まずに平地に壁溝を回らすという形態が本来的な構造であった建物跡が少なからず存在したと考えてよいのではないだろうか。これらの建物跡に設けられた竈についても、燃焼部の硬く焼け締まった火床だけを残す事例が多かったが、これも他の構造物が削平を受けて消失したと見做してしまうのはきわめて不自然である。一般的に袖部を形成する粘土等の断片すら残存していないのに、判で押したように円形に火床面だけ残されていることから判断して、竈の廃棄に際し意図的な行為があったと推定して大過ないであろう。

昨年度の調査区域の北半側では外周溝を伴う建物跡が一般的であったが、本年度の調査区域では南側に位置するSI101・135～139・142・143、南西側の調査区域境界付近のSI089・092・102～104・108等では外周溝が検出されていない。また、SI087では外周溝と同一の機能を果たし、その祖形になると考えられる外周土坑が検出された。同じような外周土坑を伴う建物跡SI095・097も調査区域南側に位置している。現時点の判断では、外周溝を伴わない建物跡および外周土坑の回らされた建物跡は外周溝を伴う建物跡より時期的に古い可能性が高い。

これらの建物跡の大部分は、外周溝の開口部や竈の位置から東－西ないしは南東－北西に主軸方位をとるが、SI133Aは東と西、SI133Bは西と西竈をもつものも確認された。

建物跡の規模は最大がSI109で 9.55×10.22 m、最小がSI154で 2.47×2.48 m、規模計測可能な建物跡の平均値をとると一辺約5m (4.95×4.88 m) となり、壁高は0cmから最も深いものでSI115の43.5 (～7.3) cmで、壁のないもの (0cm) が59軒と半数近くを占める。

建物跡とセットになる掘立柱建物跡は21軒で確認されており、2間×1間が9棟、1間×1間が5棟、2間×2間が4棟、SI127は3間×2間の建て替えで2棟、SI123が3間×2間の総柱式、規模不明が1棟である。また、外周溝の造り替えと考えられるものが10軒で確認されており、SI111は3条で2回の造り替えが行われたと考えられる。

本年度検出された建物跡のなかで建物内や外周溝等に10世紀前半と推定される火山灰が堆積しているものは、SI69・73・75・78・91・97・98・107・109・110・113・117・118・124・126・

129・131・132・135・137・140・141・147・150・151・161の26軒であった。さらに、重複関係からSI70・74→73、76→75、79・80・81→78、100→98、111→110、146→113、126・131→124、133→129、128・144・145→140、163・164→147、152・153→151、SI127→SK560・561・581という新旧関係が明らかになっているので、火山灰降下以前に構築された建物跡は少なくとも44軒は存在することになる。

これらの建物跡の中からは製鉄関連遺構が検出されており、SI091Bからは鍛造剥片と台石が検出され、その北側に隣接して検出されたSK327および鞆羽口をはじめ多量の遺物が出土したSK329は廃滓ピットの可能性が高いことから鍛冶工房跡と考えられる。昨年度の調査で検出されたSI042の外周溝先端部では、製鉄炉用と考えられる断面カマボコ形の鞆羽口（岡田 1990）が、一括廃棄されたと思われる状態で出土していることから、未確認の製鉄炉跡の存在が推定できるであろう。また、SI100Aの東壁では竈状の施設を伴い、付近では粘土の堆積が認められた。この建物跡からは砂鉄が検出されているので、製鉄関連遺構の可能性が高い。SI095でもAとした建物跡内部の不自然な位置にB竈と判断した施設が検出されており、あるいは生産関連の施設であった可能性も考えられる。

このほか、焼失家屋SI140の壁溝からは、壁板に用いられたと考えられる炭化材が埋設された状態で検出されている。

3 掘立柱建物跡

独立した掘立柱建物跡は3棟検出された。3棟とも2間×2間の側柱式であるが、SB002の柱穴は規模が大きい。

4 竪穴状遺構

竪穴状遺構は27基検出された。平面形は長方形ないし方形で、北西―南東方向に軸をもつものが多いが、必ずしも一定の方向性が認められるわけではない。性格のよく判らないものが多いが、おそらくは倉庫のような施設ではないかと推定される。

5 土 坑

土坑は651基検出された。これらは、概して調査区域の南西側、C～J-22～35区一体に多く分布する傾向が認められた。平面形は円形・楕円形・長方形・方形と様々で、規模も一様ではなく、その性格もまた多様であったと考えられる。例えば、SK423では馬の線刻画をもつ刻線文土器が出土している。東日本における奈良・平安時代の動物が描かれた遺物の類例をみると祭祀に係わる遺跡か、官衙的性格を帯びた遺跡からの出土が一般的であり、非日常的な場面で用いられたと推定されている（北条 1994）ことを考えあわせると祭祀的性格が濃いといえるであろう。また、小型特殊土器（ミニチュア）を伴うSK207・216・227・391・505・519・543・798、土玉が出土したSK389等も祭祀的なものと考えられる。下層から底面に焼土の堆積したSK045・074・131・132・158・176・177・292、外縁にリング状に焼土が全周して堆積していたSK808等も、生産関連遺構としての性格についての検討を要するほか、祭祀的な意味合

いでとらえることが可能かもしれない。

このほか、鍛冶工房跡SI091Bに隣接して検出された前述のSK327やSK329は付随する廃滓ピットと考えられた。SK361などでも多量の鉄滓や鑄羽口が出土している。また、外周溝の先端土坑にしばしば認められたが、SK228・235・241・253・356・451・462・500・551等竈の廃材等が投棄されたと推定される焼土・粘土・炭化物を出土する土坑もある。さらに、外周溝が建物への浸水防止・排水の施設、雪囲いの施設、融雪池としての施設といった機能をもっていたと考えられるならば(木村 2000)、SI087の外周土坑と判断されたSK267・269・270・271・272・276、同じくSI095に対応するSK321・322・323・324・325・330、あるいはSI097に対応するSK326・328・333・334・337・338・340・341・342・343・356・385等は、同様の用途を果たした可能性も考慮しておかなければならないであろう。

6 井戸跡

井戸跡は8基検出された。遺跡の東側に隣接して河川が流れており、水利はきわめて良好だったはずであることも考慮すると、1遺跡内での検出数としてはきわめて多いと思われる。

8基すべて素掘り井戸と考えられ、(1) 方形ないし隅丸方形の掘り方の中心部にほぼ円筒状に竪坑を掘って井戸側(宇野 1982)を設置したもの(SE005・006・011)、(2) 円形の掘り方にほぼ円筒状に竪坑を掘って井戸側を設置したもの(SE009・010)、(3) (2)に幅30cm内外の浅い外周溝を伴うもの(SE008・012)、(4) 平面形は楕円形を呈し、掘り方と竪坑の区別が不明瞭なもの(SE007)に大別される。確認面から底面までの深さは1.83m～4.08mで、2m代(2.19～2.56m)が4基である。

7 耕作跡

耕作跡は6基検出された。いわゆる畝状遺構であるが、いずれも小規模である。2～14条の浅い畝間が確認されており、各々方位角度に差異はあるものの、すべてほぼ南－北方向に軸をとっている。

8 焼土跡

焼土跡は47基検出されたが、昨年度の調査で検出された不整形を呈するものとは異なるものもこの中に含まれている。本年度の調査で検出された不整形の焼土跡は43基である。SF87～95やSF103～106の堆積状況をみても、これらは本来、西から東方向の沢筋に堆積した一連の焼土であったと考えられる。発掘調査では、便宜上繋がりの途切れたものを1単位で扱ったので、遺構番号に基づく数量処理はあまり意味をなさない。

SF086および102は円形を呈しており、平面形を確認できなかった建物跡の竈か、生産関連遺構の可能性が考えられる。また、SF084は落ち込みに焼土が流れこんだか廃棄されたもの、SF097は土坑状の掘り込みに廃棄された焼土と推定される。

9 ピット

ピットは296基検出されたが、性格はよくわからない。掘立柱建物跡や柵列などを構成する

ものが存在する可能性もある。

10 溝 跡

溝跡は85条検出された。大半の溝跡は、概して本遺跡の盛期に形成されたと考えられる建物跡よりも時期的に新しいものが多く、用排水路などの用途が推定される。このうち特に、昨年度から継続調査を行ったSD006やSD052などのような土地の区画、あるいは境界の設定といった用途を果たした可能性も考えられる長い溝跡は、重複するなどの建物跡よりも時期的に新しい。また、調査区域外にかかるものを含めて10m以下のものが40条あり、形態的にみて畝状遺構の可能性のある溝跡（SD093・094・095）も存在する。

Ⅳ 出土遺物の特徴

本遺跡では、土師器や須恵器を主体に平安時代の集落跡としてはかなり多量の遺物が出土している。その中で目に付いたものをいくつか取り上げてみると、建物跡や土坑から小型特殊土器（ミニチュア）の出土が目立ったことが、まずあげられる。火床だけが残された竈の在り方や、あるいは土玉の出土なども合わせ考えると、集落の構成員が各家屋単位で集落に共通する祭祀を行っていた可能性を考慮してよいのかもしれない。Q-19区遺構確認面では、土鈴と思われる破片も出土している。先にふれたSK423出土の馬の線刻画が描かれた刻線文土器（図2）の出土なども、集落内では特殊な位置を占める祭祀の痕跡かもしれない。なお、SI163から出土した須恵器壺底部には図2左の曲線画と類似した曲線文が施されている。また、SI095では翡翠大珠（床～掘り方上面）・須恵器小型壺（掘り方）・土玉（B竈）が出土しており、祭祀的な色彩が濃厚である。さらに、SI126・140・147では鉄斧とともに錫杖の一部が出土しており、両者はセットをなしていた可能性がきわめて高い。五所川原市持子沢D-1号窯跡でも鉄斧の出土が注目されており、岩木山北麓の製鉄集団と梵珠山西麓の窯業集団との有機的関係が説かれている（坂詰 1974）。

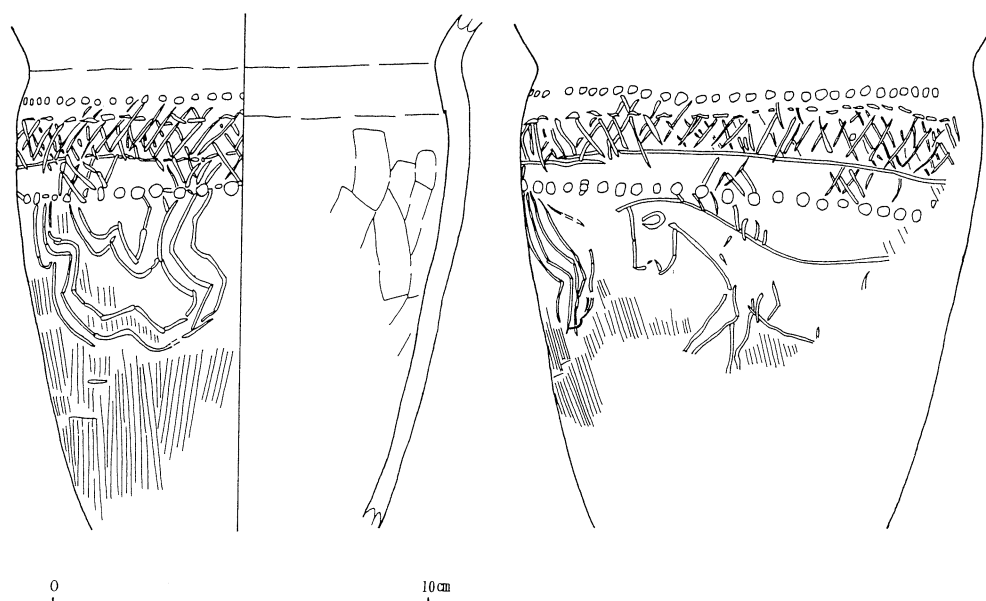


図2 馬の線刻画の描かれた刻線文土器（SK423出土）

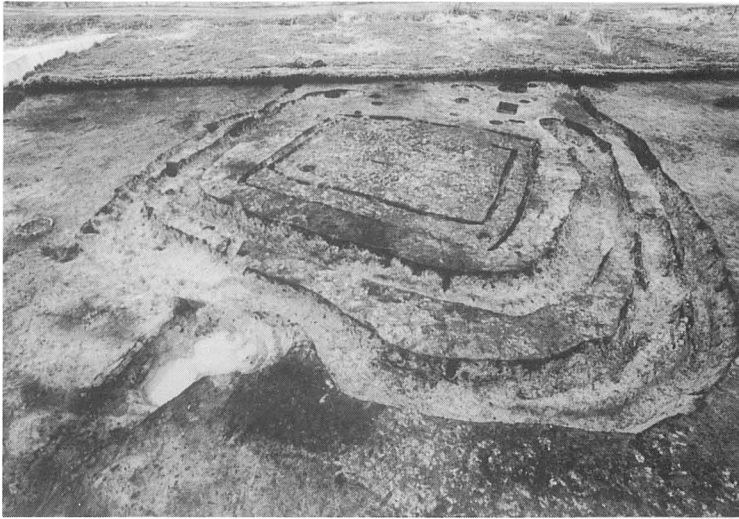
このほか、南東壁に竈をもつ建物跡SI117の南西隅では、破碎した須恵器大甕が床面を掘り凹めた掘り方に据えられた痕跡を残して出土している。また、井戸跡からは鉤棒状木製品(SE008・012)のほか曲物底板(SE006・009・012)、箸(SE008)等が出土しており、SK561からは外耳破片、SE006、C-30区遺構確認面からも外耳土器と思われる破片が出土している。

V ま と め

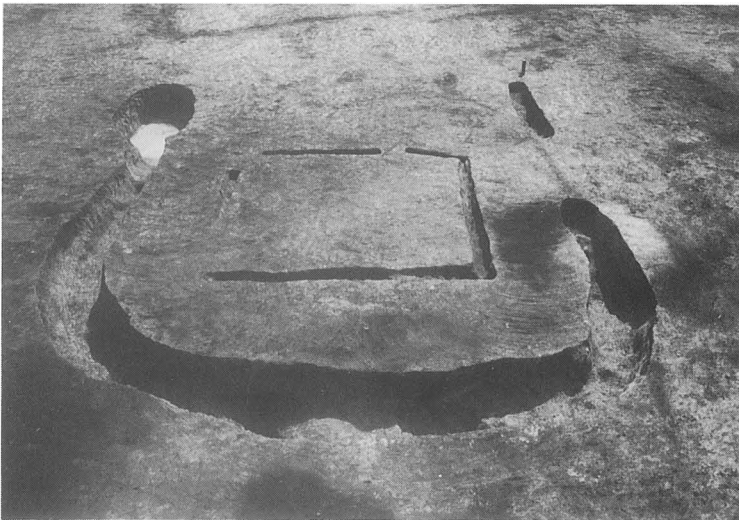
2000年度および2001年度の2か年にわたる野尻(4)遺跡の発掘調査では約49,000m²が調査の対象となり、9世紀~10世紀を盛期とする大規模集落の存在が明らかになった。検出された遺構の内訳は縄文時代のTピット2基、平安時代の建物跡166軒(建て替え重複を含めると189軒前後)、掘立柱建物跡3棟、竪穴状遺構30基、土坑816基、井戸跡12基、耕作跡(畝状遺構)11基、焼土跡106基、ピット319基、円形周溝遺構2基、埋設土器1基、溝跡148条(ただし、近・現代の道路跡の可能性のある溝跡も含む。)である。

参考文献

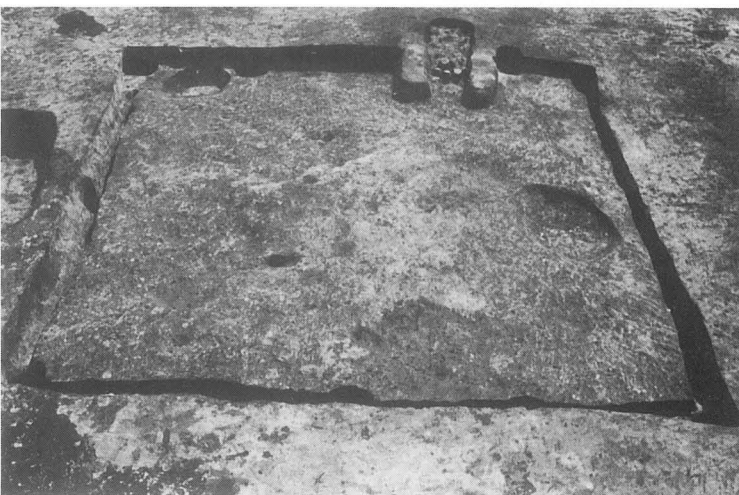
- 北条朝彦 1994 「出土遺物に描かれた動物-奈良・平安期の東日本における諸例-」『動物考古学』3
- 木村 高 2000 「津軽地方における平安時代の住居跡」『考古学ジャーナル』462
- 根本直樹・大友文彦・藤田一世・一戸松郷
2001 「野尻(4)遺跡より産出したテフラについて」(調査会委託分析報告)
- 岡田康博 1990 「羽口」『空沢遺跡』(青森県 第130集)
- 坂詰秀一 1974 「津軽持子沢窯跡第2次調査概報」『北奥古代文化』6
- 高杉博章 2001 「野尻(4)遺跡調査概報」『平成12年度 浪岡町文化財紀要』I
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』65(5)



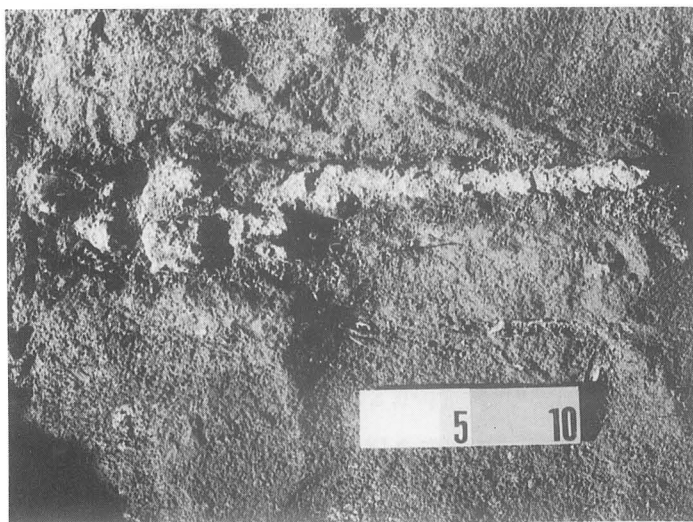
建て替え重複の65号建物跡を西から見る



重複のない114号建物跡を西から見る



外周溝をもたない136号建物跡を西から見る



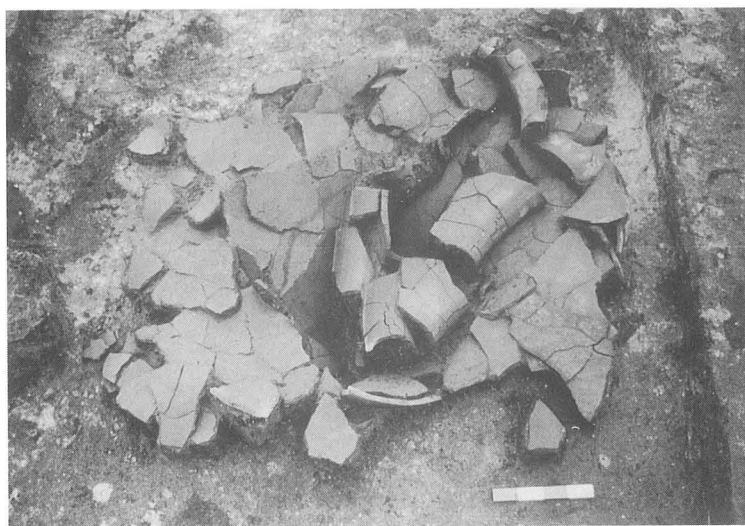
126号建物跡掘り方出土の錫杖を西から見る



焼失家屋140号建物跡出土の
鉄斧を南から見る



95号建物跡掘り方出土の小型須恵器壺を南から見る



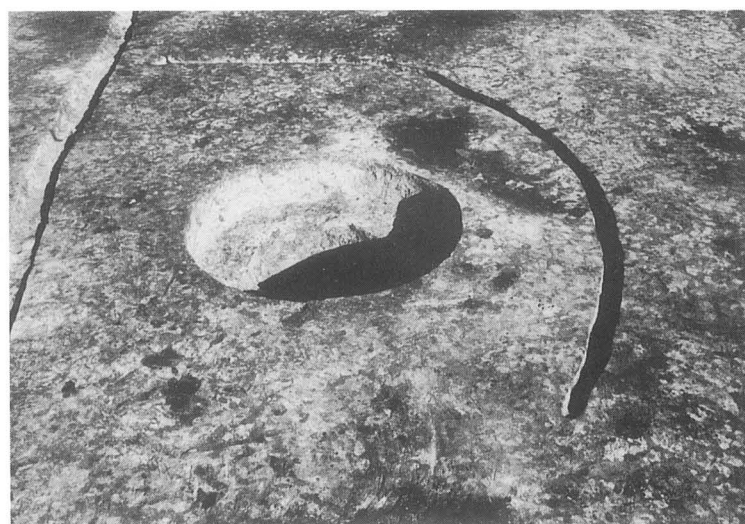
117号建物跡南西隅床面での須恵器大甕出土状態（西から）



100号建物跡東壁際で検出の炉跡状遺構を西から見る



外周溝をもつ9号井戸を西から見る



外周溝をもつ12号井戸を西から見る

発掘調査抄録

ふりがな	へいせい13ねんど のじり(4) いせきはつくつちようさがいほう							
書名	平成13年度 野尻(4) 遺跡発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	浪岡町文化財紀要							
シリーズ番号	Ⅱ							
執筆者名	高杉博章							
編集機関	浪岡町大釈迦工業団地調査会・浪岡町教育委員会							
所在地	038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1 Tel0172-62-1111							
発行年月日	西暦 2002年 3月 30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
野尻(4) 遺跡	青森県南津軽郡高屋敷字野尻1番地・他		229 29063	40度44分26秒	140度35分09秒	28,000m ²	20020416 ～ 20021116	工業団地造成
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
野尻(4) 遺跡	集落跡	平安時代・縄文時代	建物跡103軒 掘立柱建物跡3棟 竪穴状遺構27基 土坑651基 井戸跡8基 耕作跡8基 焼土跡47基 ピット296基 溝跡85条		縄文土器・石器 土師器・須恵器・鉄製品(斧・鋤杖・他) ・土製品・石製品 (コンテナ130箱)		馬の刻画が描かれた刻線文(捺文)土器が出土している	